# 魯迅輯『古小説鉤沈』校釈
## ―祖台之『志怪』（続）―

富永一登

本稿は、先に『広島大学文学部紀要』第五三巻（一九九三年）に掲載した「魯迅輯『古小説鉤沈』校釈―祖台之『志怪』―」の続きで、第一〇話から第一五話までを収録する。祖台之『志怪』の概要については、前稿を参照していただければ幸いである。

なお、前稿で、〔祖台之『志怪』の注釈書〕として、

○鄭学弢校注『列異伝等五種』（文化芸術出版社、一九八八年）

のみ挙げたが、その他にも、

○李継芬・韓海明『漢魏六朝小説選訳（下）』（上海古籍出版社、一九八八年）

に、第六、一一、一四話の三話が収録されていたので、参考文献として追加する。

また、前稿では、校勘に際して、魯迅が依拠したと考えられる鮑崇城本『太平御覧』を使用しなかったが、本稿では、〔本文の校勘に使用した文献〕に、

○鮑崇城校宋本『太平御覧』　光緒十八年版帰学海堂本

を追加する。

**10**　吳中書郎盛沖至孝①。母王氏失明。沖蹔行②、敕婢爲母作食③。婢乃取蠐螬蒸食之④。王氏甚以爲美⑤、而不知是何物⑥。兒還、王氏語曰⑦、『汝行後⑧、婢進吾一食⑨。甚甘美極⑩。然非魚非肉⑪。汝試問之。』既而問婢、婢服曰⑫、『實是蠐螬⑬。』沖抱母慟哭⑭。母目霍然開明⑮。〔珠林四十九（四部本六十二）。御覧四百十一、九百四十八〕

【校異】①盛、珠林作咸。搜神記・晉書竝作盛彦。盛字是。沖、四部本珠林・御覧九四八作冲（鮑崇城本作沖）、御覧四一一作仲。冲、沖俗字。②蹔、珠林・御覧九四八作暫。③敕、珠林・鮑崇城本御覧九四八作勅、四部本珠林・御覧四一一・九四八作勅。爲母作食、御覧竝作食母二字。④婢、珠林無。螬下、珠林有蟲字。⑤王氏、御覧

四一一作母一字。甚以爲美、鮑崇城本御覽九四八脱以爲二字。⑥而、珠林・御覽四一一無。⑦王氏語曰、御覽四一一作母曰二字。⑧後、御覽九四八無。⑨一、御覽四一一無。⑩美極、御覽四一一無此二字、御覽九四八無極字。⑪非肉、御覽四一一・鮑崇城本御覽九四八無非字。⑫婢服曰、珠林作婢伏二字（四部本珠林伏作服）。御覽九四八無婢曰二字。⑬實、御覽九四八作食。⑭母、鮑崇城本御覽四一一脱。⑮開明、御覽竝作立開。

【訓読】　呉の中書郎盛沖は至孝なり。母の王氏　失明す。沖　暫く行くに、婢に敕して母の為に食を作らしむ。婢　乃ち螬螬を取り蒸して之を食はしむ。王氏　甚だ以て美しと為すも、而も是れ何物なるかを知らず。児　還り、王氏　語りて曰く、「汝　行きし後、婢　吾に一食を進む。甚だ甘美なること極まれり。然れども魚に非ず肉に非ず。汝　試みに之を問へ」と。既にして婢に問ふに、婢　服して曰く、「実は是れ螬螬なり」と。沖　母を抱きて慟哭す。母の目　霍然として開明す。

【訳文】　呉の中書郎の盛沖は大の孝行者だった。母の王氏が失明した。沖はしばらくでかけることになり、女中に母の食事の世話をするように命じた。女中はすくも虫を取ってきて蒸して食べさせた。王氏は大変おいしいと思ったが、何を食べているのかは分からなかった。子の沖が帰ってきたとき、王氏は、「お前が出かけた後、女中が私にある食べ物を出した。おいしいことこの上なかったが、魚でもないし肉でもない。おまえちよっと尋ねてみておくれ」と語った。やがて女中に問うと、女中は平伏して、「実はあれはすくも虫でした」と言った。沖は母を抱きかかえて大声で泣き叫んだ。すると母の目はにわかに見えるようになった。

【注釈】　〈中書郎盛沖〉　中書郎は、詔令などの文書を司る役職、中書侍郎のこと。盛沖、『搜神記』では「盛彦」に作る。『晋書』巻八八孝友伝に盛彦の伝があり、この話（『搜神記』とほぼ同文）の後に、「彦仕呉、至中書侍郎。」と記す。盛彦に関する話とした方がよいと思われる。なお「盛沖」は、『三国志』（呉書）に見え、郎中とした孫権の子孫休に学を授け、孫休が即位した時は、博士となっている（『三国志』巻四八呉書孫休伝）。

〈螬螬〉　すくも虫。地虫。糞土の中にいる。『爾雅』釈虫「蟦、螬螬」の郭璞注に、「在糞土中。」といい、陸機『毛詩草木鳥獸虫魚疏』にも「螬螬、生糞中。」という。『御覽』巻九四八引『本草経』に、「螬螬、一名蟦齊、主治血痺。」と、薬効があるとされていて、後にこの話と関連づけられ、目の中の「淫膚、青翳、白膜」を治す効能があると言われるようになる（『本草綱目』巻四一）。鄭学弢校注・漢語大詞典では、「金亀子的幼虫」（コガネムシの幼虫）とする。　〈霍然〉　にわかに。すみやかな様をいう。枚乗「七発」（『文選』巻三四）「泌然汗出、霍然病已」の李善注に、「霍、疾貌也。」と

ある。

【補説】　この話は、『搜神記』巻一一に見える、「周暢」（第二七七話）・「王祥」（第二七八話）・「王延」（第二七九話）・「楚僚」（第二八〇話）・「郭巨」（第二八三話）・「衡農」（第二八六）・「羅威」（第二八七話）などと同様の、母に孝養を尽くすと奇跡が起こるという孝子伝の一つである。

祖台之『志怪』では、婢が母にすくも虫を食べさせた理由や、それを食べた母の疑念、婢に問いただす場面の描写が不明確で、母は本当においしいものを食べさせてもらったと思っていたかのようにもとれる。しかし、『搜神記』と『晋書』では、

○『搜神記』巻一一（第二八一話）

盛彦、字翁子、廣陵人。母王氏、因疾失明、彦躬自侍養。母食、必自哺之。母疾既久、至於婢使數見捶撻。婢忿恨、聞彦暫行、取蠐螬炙飴之。母食、以爲美、然疑是異物、密藏以示彦。彦見之、抱母慟哭、絶而復蘇。母目豁然即開、於此遂愈。（盛彦、字は翁子、広陵の人なり。母の王氏、疾に因りて失明し、彦躬自ら侍養す。母食ふに、必ず自ら之に哺ましむ。母疾ひ既に久しく、婢使数しば捶撻せらるに至る。婢忿恨し、彦の暫く行くを聞き、蠐螬を取り炙りて之を飴はしむ。母食ひ、以て美しと為すも、然れども是れ異物ならんかと疑ひ、密かに蔵して以て彦に示す。彦之を見て、母を抱きて慟哭し、絶して復た蘇る。母の目豁然として即ち開き、此より遂に愈ゆ。）

○『晋書』巻八八孝友伝盛彦

母王氏、因疾失明、彦每言及、未嘗不流涕。於是不應辟召、躬自侍養、母食、必自哺之。母既疾久、至于婢使數見捶撻。婢忿恨、伺彦暫行、取蠐螬炙飴之。母食、以為美、然疑是異物、密藏以示彦。彦見之、抱母慟哭、絶而復蘇。母目豁然即開、從此遂愈。（母の王氏、疾に因りて失明し、彦言及する每に、未だ嘗て涕を流さずんばあらず。是に於いて辟召に応ぜず、躬自ら侍養す。母食ふに、必ず自ら之に哺ましむ。母疾ひ既に久しく、婢使数しば捶撻せらるるに至る。婢忿恨し、彦の暫く行くを伺ひ、蠐螬を取り炙りて之を飴はしむ。母食ひ、以て美しと為すも、然れども是れ異物ならんかと疑ひ、密かに蔵して以て彦に示す。彦之を見て、母を抱きて慟哭し、絶して復た蘇る。母の目豁然として即ち開き、此より遂に愈ゆ。）

と、母にむち打たれて怨みを抱いていた婢が、盛彦の留守中に母にすくも虫を食べさせ、母が異物だと疑ってその食事の一部を残し、後で息子に見せるという筋立てになっている。筋は明確だが、母の意地悪さが目立つ。祖台之は、それを避けるために改変した可能性がある。母

が婢をむち打ったことを削除し、疑念を抱くところも「魚に非ず肉に非ず」と記すだけにし、すくも虫と分かる場面も、母が盛沖に婢に尋ねさせ、婢自身が「実は是れ蠐螬なり」と答えるように、会話文を使った文章に書き換えている。これによって、『搜神記』の文から感じられる母親の悪いイメージを消そうとしたのではなかろうか。

なお、『搜神記』巻一一では、この話の後に、「蚺蛇胆」（第二八二）という、晋の顔含が兄嫁の目の病を治すために蛇の肝を手に入れて食べさせる話を採録している。

11　吳中有一士大夫①、於都假還②。行至曲阿塘上、見一女子③、容貌端正④。便呼卽來⑤、便留住宿⑥。士解臂上金鈐繫其臂⑦、令莫更來、遂不至⑧。明日⑨、更使尋求⑩、都無此色⑪。忽過一豬圈邊⑫、見母豬臂上繫金鈐⑬。〔御覽九百三、七百十七。書鈔一百三十五〕

【校異】①一士大夫、書鈔作士人二字、御覽七一七王大夫三字。②於都假還、書鈔・御覽七一七無。③行至曲阿塘上見一女子、書鈔作于曲阿見塘上有一女子十字、御覽九〇三作至曲阿塘上見一女子九字（鮑崇城本至作西）、御覽七一七作行至曲阿回塘上有一女子十一字。④容貌端正、御覽七一七無、御覽九〇三作甚美二字、書鈔貌作皃。⑤便呼卽來、御覽竝無。⑥便留住宿、書鈔無住字、御覽九〇三作留其宿三字。⑦士解臂上金鈐繫其臂、書鈔作士乃解金鈐繫女臂八字、御覽七一七作解臂上金合繫其肘下九字、御覽九〇三作士解臂金鈐繫女臂八字（鮑崇城本鈐作鈴、下同）。⑧令莫更來遂不至、書鈔無令莫更來遂不六字、至字屬下句。御覽竝莫作暮。⑨明日、御覽竝無。⑩更使尋求、書鈔作更求女三字、御覽九〇三作使人求三字。⑪都無此色、書鈔色作人、御覽七一七此色作女人、鮑崇城本御覽七一七都作卻。⑫忽過一豬圈邊、書鈔圈作牢、御覽七一七作過猪欄邊四字、御覽九〇三作過猪圈三字（鮑崇城本九〇三猪作豬、下同）。⑬見母豬臂上繫金鈐、書鈔繫作有、御覽九〇三母上有一字、御覽七一七作見猪鉀有合五字（鮑崇城本鉀作胛）。［書鈔孔廣陶校記云、陳俞本士作一、脱容字、無便字、呼下有之字、無士字、女臂作其臂、都作卻、脱此字、脱一字。餘同。］

【訓読】　吳中に一士大夫有り、都より假もて還る。行きて曲阿の塘上に至り、一女子を見る、容貌端正なり。便ち呼べば即ち来たり、便ち留住りて宿す。士　臂上の金鈐を解きて其の臂に繫ぎ、暮に更に来たらしめんとするも、遂に至らず。明日、更に尋ね求めしむるも、都て此の色無し。忽ち一つの豬圈の辺を過ぐるに、母豬の臂上に金鈐を繫ぐを見る。

【訳文】　呉の士人が、休暇で都から郷里に帰っていた。途中、曲阿の堤のほとりで、ひとりの端正な女性を見かけた。呼ぶとすぐにやって来て、彼のもとで一夜を過ご

した。士人は腕から金の鎖をはずして女の腕につけて、暮にまた来るように言ったが、やって来なかった。翌日、女を捜させたが、そのような女はどこにもいなかった。ふとある豚小屋のあたりを通り過ぎると、母豚の足に金の鎖が結ばれているのを見た。

【注釈】　〈具中有一士大夫〉　『捜神記』（補説参照）では、「晋有一士人、姓王、家在具郡。」と、晋のときの士人で、家が具郡にあった王という人だと記す。　〈於都假還〉　都から休暇で郷里に帰る。鄭学弢校注は、「在京都請假回家」と解するが、これは正確でなく、李継芬・韓海明『漢魏六朝小説選訳』の「乗假日由都城還郷」と訳す方がよい。「假還」は、『世説新語』言語篇59「郗受假還東。」（郗 假を受けて東に還る）、『世説新語』排調篇56「顧長康作殷荊州佐、請假還東。」（顧長康 殷荊州の佐作りしとき、假を請ひて東に還る）、『幽明録』（『古小説鉤沈』本第一九八話、『御覧』巻九三四引）「會稽郡吏鄮縣薛重得假還家。」（会稽郡吏鄮県の薛重 假を得て家に還る）の、「受」「請」「得」が略されたもの。最初の『世説新語』言語篇の郗超の話は、『文選』巻三八任昉「為斉明帝讓宣城郡公第一表」の「家國之事、一至於斯」李善注引孫盛『晋陽春秋』（『類聚』巻一三引同）にも記されていて、そこでは、「郗超假還東」（胡氏考異に「何校郗改郗、陳同、是也。各本皆誤。」とあるように、「郗」は「郗」の誤り）と、「受」を省略してある。　〈曲阿塘上〉　曲阿は、県名。今の江蘇省丹陽市。曲阿湖という湖がある。塘上は、つつみのほとり。　〈金鈐〉　金の鎖。鄭学弢校注は「金鏈子」、『漢魏六朝小説選訳』は「鎖」とする。「鈐」は、鍵、錠前の意だが、鍵では意が通じにくいので、チェーン状の鎖の意に解した。『北堂書鈔』巻一三五「服飾部」四「鈐」には、この話と、『幽明録』（『古小説鉤沈』本第一三五話）の「義熙三年、山陰徐琦每出門、見一女子、皃極豔麗。琦便解臂上銀鈐贈之。女曰、『感君來貺。』以青銅鏡與琦、便爾結爲伉儷。（義熙三年、山陰の徐琦 門を出づる毎に、一女子を見る、皃極めて艶麗たり。琦 便ち臂上の銀鈐を解きて之に贈る。女曰く、「君の来貺に感ず」と。青銅の鏡を以て琦に与へ、便爾ち結びて伉儷と為る。）の二話を引く。当時の男性は、金や銀の腕輪のようなものを身につけていたのであろう。鄭晩晴校注『幽明録』には、「銀練子」（「練」は「鏈」の誤植であろう）と解する。なお、『書鈔』一三六にも同じ『幽明録』を引き「鈐」に作る。『御覧』八一二引『幽明録』は「鈴」に作る。『幽明録』の話は、『異苑』巻六にも見え、「鈐」に作る。祖台之『志怪』と同話を記載する『捜神記』は「金鈴」に作る。　〈都無此色〉　そのような姿形の女はどこにもいない。「色」は、鄭学弢校注に「此処色字指形体、長相。」と解する。　〈猪圈〉　豚小屋。『捜神記』は「猪欄」に作る。『論衡』吉験篇に「猪溷」

というのも同じ。

【補説】　この話は、次の『搜神記』巻一八（第四三〇話）「猪臂金鈴」（『広記』巻四三九引『搜神記』同。明鈔本『広記』作「出續搜神後記」。）と同じである。

晉有一士人、姓王、家在呉郡。還至曲阿、日暮、引船上當大埭。見埭上有一女子、年十七八。便呼之留宿。至曉、解金鈴繫其臂。使人隨至家、都無女人。因逼猪欄中、見母猪臂有金鈴。（晉に一士人有り、姓は王、家は呉郡に在り。還りて曲阿に至り、日暮れ、船を引きて上げて大埭に当つ。埭上に一女子有るを見る、年十七八なり。便ち之を呼び留宿せしむ。暁に至り、金鈴を解きて其の臂に繫ぐ。人をして随ひて家に至らしむるも、都て女人無し。因りて猪欄の中に逼まるに、母猪の臂に金鈴有るを見る。）

男が女と懇ろな中になり、その女が実は異類だったという異類婚姻譚である。六朝志怪に見られる異類婚説話については、拙稿「人虎伝の系譜一六朝化虎譚から唐伝奇小説へ一」（『中国中世文学研究』13号、一九七八年）に一覧表を掲載してある。また、専著に、顔慧琪著『六朝志怪小説異類姻縁故事研究』（文津出版社、一九九四年）がある。

曲阿には、いくつかの同類の話が伝承されていたようで、次のようなものが見られる。

○『甄異伝』（『古小説鉤沈』本第八話、『広記』巻三二四、『御覧』巻七一八引）、『異苑』巻六同話。

沛郡人秦樹者、家在曲阿小辛村。義熙中、嘗自京歸、未至二十里許、天暗失道、遙望火光、往投之。見一女子秉燭出、云、「女弱獨居、不得宿客。」樹曰、「欲進路、礙夜不可前去、乞寄外住。」女然之。樹既進坐竟、以此女獨處一室、慮其夫至、不敢安眠。女曰、「何以過嫌、保無慮、不相誤也。」爲樹設食、食物悉是陳久。樹曰、「承未出適、我亦未婚、欲結大義、能相顧否。」女笑曰、「自顧鄙薄、豈足伉儷。」遂與寢止。向晨、樹去、乃俱起執別。女泣曰、「與君一覩、後面莫期。」以指環一雙贈之、結置衣帶、相送出門。樹低頭急去、數十歩、顧其宿處、乃是冢墓。居數日、亡其指環、帶結如故。

○『幽明録』（『古小説鉤沈』本第一六九話、『類聚』巻八二引）

東平呂球、豐財美貌、乘船至曲阿湖、値風不得行、泊菰際。見一少女、乘船採菱、舉體皆衣荷葉。因問、「姑非鬼邪、衣服何至如此。」女則有懼色、荅云、「子不聞荷衣兮蕙帶、倏而來兮忽而逝乎。」然有懼容、迴舟理棹、逡巡而去。球遙射之、卬獲一獺、向者之船、皆是蘋蘩薀藻之葉。見老母立岸側、如有所候、望見船過、因問云、「君向來不見湖中採菱女子邪。」球云、「近在後。」尋射、復獲老獺。居湖次者咸云、「湖中常有採菱女、容色過人、有時至人家、

結好者甚衆。」

前者は、墓中の死んだ女と一夜を過ごす話で、後者は獺が女の姿で男を誘う話である。また、

○『幽明録』（『古小説鉤沈』本第一八八話、『御覧』巻七六六引）

曲阿有一人、忘姓名。從京還、逼暮不得至家。遇雨、宿廣屋中。雨止月朗、遙見一女子、來至屋簷下。便有悲嘆之音、乃解腰中絶繩、懸屋角自絞、又覺屋簷上如有人牽繩絞。此人密以刀斷絶繩。又斫屋上、見一鬼西走。向曙、女氣方蘇、能語。家在前、持此人將歸、向女父母説其事、或是天運使然、因以女嫁與爲妻。

というような、首をつろうとする女を助けて、結ばれる話もある。

豚が女に変身する話は、次のような唐代の話にも見られる。

○『太平広記』巻四三九「畜獸」六「元佶」（出『広古今五行記』）

唐長安中、豫州人元佶居汝陽縣、養一牝猪經十餘年。一朝失之。乃向汝陽、變爲婦人。年二十二三許、甚有資質。造一大家門云、「新婦不知所適。聞此須人養蠶。故來求作。」主人悦之、遂延與女同居。其婦人其能梳粧結束、得錢輒沽酒、並買脂粉而已。後與少年飲過、因入林醉臥。復是牝猪形耳。兩頰猶有脂澤在焉。

○『太平広記』巻四三九「畜獸」六「李汾」（出『集異記』）

李汾秀才者、越州上虞人也。性好幽寂、常居四明山。山下有張老莊。其家富、多養豕。天寶末、中秋之夕、汾步月於庭、撫琴自適。忽聞戸外有嘆美之聲、問之曰、「誰人夜久至此山院。請聞命矣。」俄有女子笑曰、「冀觀長卿之妙耳。」汾啓戸視之、乃人間之極色也。唯覺其口有黒色。汾問曰、「子得非神仙乎。」女曰、「非也。妾乃山下張家女也。夕來、以父母暫過東村、竊至於此、私面君子。幸無責也。」汾忻然曰、「娘子既能降顧。聊可從容。」女乃昇階展敍、言笑談謔。汾莫能及。夜蘭就寢、備盡繾綣。俄爾晨鷄報曙、女起告辭。汾意惜別。乃潛取女青氈履一隻、藏衣笥中。時汾欹枕假寐。女乃撫汾悲泣。求索其履、曰、「願無留此。今夕再至。脱君留之、妾身必死謝於君子。」汾不允。女號泣而去。汾覺、視牀前鮮血點點出戸。汾異之、乃開笥、視青氈履、則一猪蹄殼耳。汾惶駭、尋血至山前張氏溷中。見一牝豕、後足刓一殼。豕視汾、瞋目咆哮、如有怒色。汾以事白張叟。叟即殺之。汾乃棄山院、別遊他邑。

特に後者は、豚が化した女と一夜を過ごす話であり、六朝志怪の豚に関する異類婚説話をもとに創作されたかと思われるような話である。

なお、楽府詩に「塘上行」があり、棄婦の悲しみを詠う（『文選』巻二八陸機楽府「塘上行」李善注引『歌録』によると、古辞とも、甄皇后あるいは魏の文帝とも武帝とも言われるという）。陸機の「塘上行」について、『楽府詩集』巻三五の解題には、「言婦人衰老失寵、行於塘上、而為此歌。」という。また、『南史』巻五〇劉璡伝に、璡が友人の孔逷と舟に乗っていたところ、塘上に一人の女がいたのを、孔逷が目で追って「美しくて色っぽい」というと、璡は、君子の言うべきことではない、君は我が友ではないと言い交わりを断ったという話がある。塘上と女性は、関連づけられるものがあったのかもしれない。

12　廷尉徐元禮嫁女、従祖與外兄孔正陽共詣徐家。道中有土牆①、見一小兒、倮身正赤②、手持刀、長五六寸、坐牆上磨甚駃③、獨語。因跳車上曲闌中坐④、反覆視刀、輒舐之。至徐家門前桑樹下⑤、又跳下、坐灰中、復更磨刀。日晡、新婦就車中、見小兒持刀入室、便刺新婦、新婦應刀而倒。扶還解衣、視心腹紫色⑥、如酒槃大。有頃便亡⑦。鬼子出門儛刀。上有血、塗桑樹葉⑧、火燃⑨、斯須燒盡⑩。〔御覧三百四十五〕

【校異】①牆、御覧作墻、下同。鮑崇城本與鉤沈本竝同。②倮、鉤沈本作裸。今據御覧改。③坐、鉤沈本作企。今據御覧改。鮑崇城本與鉤沈本同。駃、鮑崇城本作駛。④闌、御覧作蘭、鮑崇城本與鉤沈本同。⑤桑、御覧作棄、下同。⑥心、鉤沈本作小。今據御覧改。鮑崇城本與鉤沈本同。⑦有頃、鉤沈本作炊頃。今據御覧改。鮑崇城本與鉤沈本同。⑧樹下、鉤沈本衍葉字。今據御覧改。⑨燃、鉤沈本作然。今據御覧改。⑩須、御覧作須、鮑崇城本與鉤沈本同。燒下、鉤沈本無盡字。今據御覧補。鮑崇城本與鉤沈本同。

【訓読】　廷尉の徐元礼女を嫁がしむるに、従祖と外兄の孔正陽と共に徐の家に詣る。道中に土牆有り、一小児を見る、倮身にして正赤、手に刀を持つ、長さ五六寸、牆上に坐して磨くこと甚だ駃く、独語す。因りて車上に跳び曲闌の中に坐し、反覆して刀を視、輒ち之を舐む。徐家の門前の桑樹の下に至り、又跳び下り、灰中に坐して、復た更に刀を磨く。日晡れ、新婦車中に就くに、小児刀を持ちて室に入るを見る、便ち新婦を刺し、新婦刀に応じて倒る。扶け還り衣を解くに、心腹に紫色の、酒槃の如く大なるを視る。頃有りて便ち亡す。鬼子門を出でて刀を儛はす。上に血有り、桑樹に塗るに、火燃え、斯須にして焼け盡く。

【訳文】　廷尉の徐元礼が娘を嫁がせるとき、父方の親族と従兄の孔正陽が一緒に徐の家を訪ねた。途中に土塀があり、ひとりのこどもが、裸で真っ赤な体をして、手に長さ五、六寸の刀を持ち、土塀の上に座って一所懸命に磨きながら、独り言を言っているのを見かけた。（孔

正陽らが乗った車が通りかかると）車に飛び乗り手すりの内側に座って、何度も刀を見、それを舐めた。徐の家の門前にある桑の木の下にやって来ると、飛び降りて、灰の中に座って、また刀を磨いた。日が暮れて、新婦が車中に入ると、こどもが刀を持って車内に入り、すぐに新婦を刺すのが見えた。新婦は刺されるとすぐに倒れた。新婦を抱えて家に入り服を脱がせてみたら、心臓のあたりから腹にかけて、酒器を置く盆ほどの大きさの紫色の痣があった。しばらくして新婦は亡くなった。こどもの化け物は門を出でて刀を振り回した。刀には血がついていて、桑の木に塗ると、火が燃え、しばらくして焼き尽くした。

【注釈】　〈廷尉〉　獄訟を司る官職名。　〈従祖〉　父方の親戚。従祖父なら、父のいとこ。従祖兄弟なら、またいとこ。　〈外兄〉　いとこ。父の姉妹の子で自分より年長のもの。　〈坐牆上磨甚駛〉　「坐」の字、鮑崇城本『御覧』・鈎沈本は「企」に作る。それだと何かを待ち望んで「企つ」ている意となる。　〈曲闌〉　車についている曲がった手すり。『宋史』輿服志によると、車の四方につけてあるという。鄭学弢校注では、「車上欄干湾曲之処、也就是車子角落里。」と解する。　〈日晡〉　日暮れ。「晡」は、「餔」（『説文』に「餔、申時食也。」とある）と同じ。　〈心腹〉　心臓と腹。鮑崇城本『御覧』・鈎沈本は、「小腹」に作る。「小腹」は、臍より下の部分をいう。　〈酒槃〉　酒の道具を入れる盆。「槃」は「盤」と同じ。『漢語大詞典』には「放置酒具的盤子」という。　〈有頃〉　しばらくして。鮑崇城本『御覧』・鈎沈本は、「炊頃」に作る。「炊頃」は、「一炊頃」（陸游「秋夜聞蘭亭天章寺鐘」に見える）というのと同意で、時間の経過の短いことを表すのであろう。ただ、六朝の用例を見ないので、宋本『御覧』に従って「有頃」に作るのがよいと思われる。

【補説】　この話は、何か怨恨があったのか、あるいは病気で急死することを鬼の仕業として具現化したものか不明である。前者は、徐元礼や孔正陽の事跡が分からないので、この話からだけでは何とも言えない。後者とすれば、「病膏肓に入る」という言葉で有名な『春秋左氏伝』（成公十年）の話を始めとして、六朝志怪にも、「鬼が矛で人を刺す」（『搜神記』巻二・第四八話）、「鬼が鑿を頭に打ち付ける」（『搜神記』巻一六・第三七九話）、「鬼が耳の穴から魂を抜き取る」（祖沖之『述異記』第八九話）、「鬼が腹の中に入って腹痛を起こす」（『搜神後記』巻六・第一一話）など多数類話が見られる。

13　荀晞爲兗州鎮、去京師五百里。有貢晞珍異食者。欲貽都邑親貴、慮經信宿之間、不復鮮美。募有牛能日行數百里者、當厚賞之。有人進一牛云、『此一日行千里①。』晞乃命具丁車善馭、書疏發遣。旦發、日中到京師。取荅

書還、至一更始竟便達②。晞以其駿快、筋骨必將有異③、遂殺而觀之、亦無靈異、唯見雙筋如小竹大④、自頭挾脊著肉裏⑤。故外不覺也。〔御覽九百〕

【校異】①日上、鉤沈本脱一字。今據御覽補。②竟、鉤沈本作進。今據御覽改。③筋、御覽作筋。鮑崇城本與鉤沈本同。④唯、鉤沈本作惟。今據御覽改。雙上、鉤沈本・鮑崇城本無見字。今御覽補。筋、鮑崇城本與鉤沈本作肋。今據御覽改。⑤著、御覽作着、鮑崇城本與鉤沈本同。裏、鉤沈本作裏。今據御覽改。

【訓読】　荀晞　兗州の鎮と為り、京師を去ること五百里なり。晞に珍異の食を貢ぐ者有り。都邑の親貴に貽(おく)らんと欲するも、信宿の間を経て、復た鮮美ならざるを慮る。牛の能く日に数百里を行く者有るを募り、当に厚く之に賞すべしといふ。人有り一牛を進めて云ふ、「此れ一日に千里を行く」と。晞　乃ち命じて丁車善馭を具へ、書疏をばもて発遣せしむ。旦に発して、日中に京師に到る。荅書を取りて還り、一更の始めて竟(たは)るに至り便ち達す。晞　其の駿快なるを以て、筋骨必ず將に異有らんとし、遂に殺して之を観る。亦霊異無く、唯だ双筋の小竹の如く大なるが、頭より脊を挾みて肉の裏に著(つ)くを見るのみ。故に外よりは覚らざるなり。

【訳文】　荀晞は兗州刺史となり、都から五百里離れたところにいた。晞に珍しい食べ物を献上するものがいた。都にいる親戚や貴人に送りたいと思ったが、二泊もの時間がかかったら、新鮮でなくなると心配した。そこで一日に数百里を行く牛を募り、さしだした者にはたくさんの褒美をとらせると言った。一頭の牛を献上する者がいて、「この牛は一日に千里を行きます」と言った。晞は人夫と車と上手な御者を準備させ、書簡を携えて出発させた。朝に出発して、昼には都に着いた。返書をもらって、夜早くに帰ってきた。晞はあまりにも速いので、筋骨に変わったところがあるのだろうと、その牛を殺して観察した。何も不思議なところはなく、ただ二本の小さな竹の太さの筋が、首から背中を挾んで延び、肉の裏側についていた。だから外から見ては気づかなかったのだ。

【注釈】　〈荀晞〉　西晋の武将。字は道將。恵帝の時、兗州刺史となる。懐帝の永嘉元年（三〇七）に征東大将軍、五年（三一一）に東海王司馬越を討って大将軍になったが、同年石勒の陣中に没す。『晋書』巻六一に伝がある。　〈為兗州鎮〉　兗州刺史になったことをいう。兗州は、今の山東省の北部から河北省南部一帯。当時、荀晞は廩丘（今の山東省范県）に鎮していた。　〈京師〉　都。この時は洛陽にあった。　〈信宿〉　二泊すること。『春秋左氏伝』（荘公三年）に「凡師一宿為舎、再宿為信、過信為次。」とある。　〈具丁車善馭〉　人夫と車と上手な御者を準備する。「丁」は成年男子のこと。鄭学弢校注に「準備好夫子、車輌和会赶車的人。」と解する。

〈書疏發遣〉　手紙を持って出発させる。「書疏」は書簡。鄭学弢校注に「携帯書信出発。」と解する。　〈至一更始竟便達〉　夜早くに帰ってくる。夜を五つに分けて五更とし、「一更」は夜の最初の時間をいうので、「至一更始竟」は、夜の最初の時刻が過ぎたばかりの時にという意味になる。鮑崇城本・鈎沈本は「竟」を「進」に作る。それだと、「一更の始めて進むに至り」（夜の最初の時刻が始まったばかりの時）の意味になる。鄭学弢校注本は「進」字に作り、「到了剛跨進一更的時候就回到兗州。」と解する。　〈雙筋〉　二本の筋。「筋」は「筋」の俗字。鮑崇城本・鈎沈本は「肋」（あばら骨）に作るが、意味から考えて、「筋」の方が適当と思われる。

【補説】これは、通常では二泊かかる距離を一日で往復するという超能力を持った牛の話である。牛の霊異に関するものとしては、金牛が出現する話が有名である（澤田瑞穂『金牛の鎖』平凡社、一九八三年参照）。その他にも、「牛が売られることを察知して、食事もとらず涙を流して痩せる」（『異苑』巻三）、「殺されそうになった牛が涙を流してお辞儀する」（『幽明録』第九六話）など、牛が感情を表すような話がある。

ただ、この話の背景には、苟晞の残酷さが語られているように思われる。『晋書』本伝によれば、苟晞の残酷さは、「日び斬戮を加へ、流血 川と成り、人 命に堪えず。号して屠伯と曰ふ。」と記されている。また弟の苟純は更に残虐で、人々は「小苟は大苟よりも酷なり」と言ったという。苟晞兄弟が当時残虐だという悪評を被っていたことが、異能を持つ牛を殺してまで、その特異性を探ろうとする話につながったのではなかろうか。

14　騫保至檀丘隕①、上北樓宿。葦鼓二中②、有人著黄綵單衣白帢③、將人持炬火上樓④。保懼、藏壁中⑤。須臾⑥、有二婢上⑦、使迎一女子上⑧。與白帢人入帳中宿⑨。未明、白帢人輒先去⑩。如此四五宿⑪。後向晨、白帢人纔去⑫、保因入帳中、持女子問⑬、「向去者誰。」荅曰⑭、「桐郎。道東廟樹是⑮。」至葦鼓二中⑯、桐郎復來⑰。保乃斫取之、縛著樓柱。明日視之、形如人、長三尺餘。檻送詣丞相、渡江未半、風浪起。桐郎得投入水、風波乃息⑱。〔類聚八十八（作「祖后怪曰」）。御覽九百五十六〕

【校異】①至、類聚作坐。檀、鮑崇城本・鈎沈本作壇。今據類聚・御覽改。丘、類聚作近。②葦、類聚・御覽竝作暮、下同。鼓、御覽作皷。③著、御覽作着、下同。衣白、鮑崇城本作白衣。帢、類聚作恰、下同。④將、類聚作得。⑤藏、鮑崇城本作止。⑥須、御覽作須、類聚・鮑崇城本與鈎沈本同。⑦二、鮑崇城本・鈎沈本作三。今據類聚・御覽改。上下、類聚・鮑崇城本・鈎沈本有帳字。今據御覽刪。⑧使下、御覽有婢字。鮑崇城本脱使字。⑨中、類聚無。⑩人、類聚無。輒、御覽作輙、類聚・鮑崇

城本與鉤沈本同。⑪此、御覧作是、鮑崇城本與鉤沈本同。⑫如此四五宿後向晨白帢人纔去、類聚無此十三字。⑬持女子問、類聚・鉤沈本作問侍女子。今據御覧改。⑭荅、類聚作答。⑮桐下、御覧有侯字。廟樹、御覧作樹廟、類聚・鮑崇城本與鉤沈本同。⑯鼓、類聚無。⑰復、御覧無。⑱波、鮑崇城本作浪。

【訓読】　騫保　檀丘隅に至り、北楼に上りて宿す。暮鼓二中、人有り黄練の単衣白帢を著け、人を将ゐて炬火を持たしめ楼に上る。保　懼れ、壁中に蔵る。須臾にして、二婢の上る有りて、一女子を迎へて上らしむ。白帢の人と帳中に入りて宿す。未明に、白帢の人輒ち先づ去る。此くの如きこと四五宿なり。後　晨に　向とするに、白帢の人　纔かに去れば、保　因りて帳中に入り、女子を持して問ふ、「向に去りし者は誰ぞ」と。荅へて曰く、「桐郎なり。道東の廟樹　是れなり」と。暮鼓二中に至り、桐郎復た来たる。保乃ち斫りて之を取り、楼柱に縛著す。明日　之を視れば、形は人の如く、長三尺余なり。檻送して丞相に詣らんとし、江を渡ること未だ半ばならざるに、風浪起こる。桐郎　投じて水に入るを得、風波乃ち息む。

【訳文】　騫保は檀丘隅に行き、北楼に登って泊まった。夜の鼓が二更の時刻を告げたとき、黄色の練り絹の単衣を着て白い頭巾をかぶった人が、従者にたいまつを持たせて楼に登ってきた。保は恐ろしくなり、壁の陰に隠れた。しばらくして、二人の下女が登ってきて、一人の女を迎へに行き楼に登らせた。女は白い頭巾の人と帷の中に入って一夜を過ごした。夜明け近くになると、白い頭巾の人が先に出ていった。このようなことが四、五晩続いた。その後いつものように夜が白みかけると、白い頭巾の人が出ていくとすぐに、保は帷の中に入り、女を捉えて、「先ほど出ていった者は誰か」と尋ねた。女は、「桐郎様です。道の東にある廟の樹があの方です」と答えた。夜の鼓が二更の時刻を告げたとき、桐郎がまたやって来た。保は斬りつけて捉え、楼の柱に縛りつけた。翌日見ると、姿形は人のようで、身の丈は三尺余だった。檻に入れて丞相のもとに送り届けようとしたが、江を半分も渡らないところで、波風が起こった。桐郎がその機会に水の中に飛び込むと、風波が止んだ。

【注釈】　〈檀丘隅〉　どこにあるかは未詳。「隅」には、堤・塞・村の意がある。ここはおそらく「檀丘」という名の村であろう。　〈暮鼓二中〉　夜の二更を告げる鼓の音。『漢魏六朝小説選訳』には、「寺廟中夜間用来報時的鼓。」と解する。鄭学弢校注は「夜里二更中間。」と解する。　〈黄練單衣白帢〉　黄色の練り絹の単衣と白い頭巾。単衣について、『漢魏六朝小説選訳』では、「為晋代江南人氏在交際場合所穿的盛服。」と注する。『搜神記』巻四（第七六話）で、河伯の娘との結婚式で男のために準備されたものに、「絲布單衣」があり、『搜神

記』巻七（第二一三話）には、晋の永嘉年間（三〇七～三一三）に士大夫が競って「生箋單衣」を着たとあり、『搜神後記』巻九（第九九話）に、晋の太元年間（三七六～三九六）に後宮の妓女たちを懐妊させた猿の化けた少年が「黄練單衣」を着ていたとある。その他にも、鬼などが「黄練單衣」を着て出現する話が多く見られる。「帢」については、李格非・呉志達『文言小説』、『漢魏六朝小説選訳』、鄭学弢校注ともに、古代の知識人がかぶった頭巾だと注する。〈持女子問〉　女を捉えて尋ねる。類聚・鉤沈本は「問侍女子」に作る。それだと、「侍女子に問ふ」（下女に尋ねた）となる。ここでは残っていた女に直接尋ねたと解する方が適当だと思われるので、『御覧』に従った。〈縛著〉　縛りつける。この「著」について、江藍生『魏晋南北朝小説詞語匯釈』（二八三頁）では、動作が到達するところを示す、「在」「于」に相当する介詞の例として挙げてある。

【補説】これは、樹木の精霊が男に化けて現れ、女と夜を過ごすという話であり、後半は妖怪退治の要素も含まれている。樹木の精霊の話は、『搜神記』巻一八の第四一五・四一六・四一七・四一八などに見らるが、たいていは大木を切ることと怪の退治とが一体となったものである。また、祖台之『志怪』の第一話（『幽明録』第三一話も同じ）のように、樹木の精霊が小さな老人の姿で現れ、山林伐採に警告を発する話もある。自然に対して人為を及ぼすときに抱く畏れが、このような話を作り出したのであろう。ただ、この話では、女との密会という要素が加わっているのが、同類の話の中で特異な点である。

15　會稽山陰東郭氏女、先與縣人私通。此人估還於縣東靈慈橋①、女往入船就之、因共寢接②。爲設食鱠蝤③。食畢、女將兩鱠蝤上岸去。船還來至郭、逢人語此女已死。乃往省之、尚未殯也。發衾視之、兩手各把一鱠蝤。（御覽九百四十三）

【校異】①估、御覽作買、鮑崇城本與鉤沈本同。②接、御覽空格、鮑崇城本與鉤沈本同。③鱠、御覽作食、鮑崇城本與鉤沈本同。

【訓読】　会稽山陰の東郭氏の女、先に県人と私かに通ず。此の人 估ひて県の東の霊慈橋に還るに、女 往きて船に入りて之に就き、因りて共に寢接す。為に設けて鱠蝤を食はしむ。食ひ畢り、女 両つの鱠蝤を将ちて岸に上りて去る。船 還り来たり郭に至り、人に逢ふに此の女已に死せりと語る。乃ち往きて之を省るに、尚ほ未だ殯せざるなり。衾を発きて之を視るに、両手に各おの一鱠蝤を把る。

【訳文】　会稽郡山陰県の東郭氏の娘は、先頃、県内の男とひそかに情を通じ合っていた。この男は行商に出かけて、県の東の霊慈橋まで帰ってきたとき、娘が船の中

の男のところにやって来たので、一緒に床に入った。男は娘のために為に設けて鰌蝥を食はしむ。食ひ畢り、女両つの鰌蝥を将ちて岸に上りて去る。船還り来たり郭に至り、人に逢ふに此の女已に死せりと語る。乃ち往きて之を省るに、尚ほ未だ殯せざるなり。衾を発きて之を視るに、両手に各おの一鰌蝥を把る。

【注釈】〈會稽山陰〉今の浙江省紹興市。〈鰌蝥〉大きな蟹。蝤蛑と同じ。『御覧』巻九四三「鱗介部」に「鰌蝥」があり、この祖台之『志怪』の話と『嶺表録異』を引く。『嶺表録異』は、唐・劉恂の撰で魯迅の校訂本があり、「蝤蛑、乃蟹之巨而異者。」と記す。

【補説】この話は、「ひそかに愛し合っていた男女がいて、男が徴兵や行商で長期間留守にしている間に、女が別の男と結婚させられるか、あるいは亡くなってしまう」という話と、「墓中の死んだ娘と結ばれる」幽婚譚の二つの要素をもっている。前者は、『搜神記』巻一五・第三六〇話の「河間郡男女」に代表されるように、愛情の深さによって奇跡が起こって女が生き返る再生譚となるのが通常であるが、この話では、再生にまで及んでいない。このように、六朝志怪の「鬼」の話では、愛情に焦点をあてたものは少数であるが、唐代になると、これが中心になってくる。拙稿「唐代における鬼の小説―『太平広記』鬼類聚を中心として―」（『学大国文』二七号、一九八三年）参照。